

最優秀賞

神奈川県社会福祉協議会会長賞

小さな福祉

大磯町立大磯中学校

三年 小江 哲朗

僕は生まれつき手足が不自由で、特に右手と右足が動かすのにくい。激しく転倒するリスクがあるため、屋外では装具をつけて生活している。

この障害のせいで不便なことも多い。同学年の他の生徒より運動能力が著しく低いので、体育や運動会などでの活動がとても苦手だ。

また、どうしても歩く時や立つ時に体が傾き、歩き方も不安定なので、手すりのない階段を一人で登るなどの行動ができない。道路の舗装の割れ目やごくふつうの階段、道端の石や木の根。健常者が気に留めることもなく通過するであろうこういった存在も、僕の行く手を阻む強敵となる。

次に困るのは、からかわれることである。僕の装具や独特な歩き方は嫌でも人目につく。バカにされたり、歩き方を真似されたりしたことが何度かある。僕はそこまで気にするタイプではないのだが、やはりどこかに自分を軽べつする人がいるかもしれない、というのは不安の種だ。初対面の人と会ったときも、ついつい「この人も自分をからかってくるのではないか」と失礼な想像をしてしまう。

このように書くと、僕は日々苦勞して過ごしているとと思われるかもしれない。しかし僕は、自分が幸せ者であるということは疑いようがないと思っている。なぜなら、僕は人に助けてもらうことが多いからだ。両親や医者、理学療法士の方はもちろんだが、何も家族と専門家だけではない。階段を下りるときに支えてくれる人。重い荷物を代わりに持つてくれる人。そしてなにより、障害のことを抜きにして、僕と何の変哲もない会話をしてくれる人。僕から見れば、何気ない日常の中にいる人皆が、僕を支え、助けてくれる恩人なのだ。

小学生のときだった。友達と、僕の足について話していた時のことだ。僕の障害は治るものなのか、と尋ねられたので、治らない、と答えた。すると彼は、満面の笑顔で「きつと治るよ!」と言ったのだ。結論から言うことやはり治ることはないのだが、僕はこの言葉がとてもうれしかった。治るかどうかの問題ではなく、彼が自分を励ましてくれたことに感動したのだと思う。もう三、四年前の出来事だが、きつと死ぬまで忘れないだろう。

不便なことがあるからこそ、自分を支えてくれる人の優しさ、温かさを敏感に感じとれるようになったのかもしれない。

ここまで書いてふと思った。では自分はどうかだろうか。これだけ多くの人に支えられ、助けられておきながら、僕の今までしてきたことといえれば自分のことだけだ。僕も、誰かを支えたり、助けたりしなくてはいけないのではないだろうか。

では、誰かを「助ける」「支える」とはどういうことなのだろうか。さらに言うと「福祉」とは何なのだろうか。

僕は今まで「福祉」という言葉に対して、法律や社会保障制度が関係する「なんとなく難しいもの」というイメージを抱いていた。しかしこの作文を書くことを通して、「福祉」とは皆が暮らしやすいように人々がお互いを思いやることではないかと具体的に考えられた。多額のお金と長い時間をかけ、たくさんの人を対象に行く「大きな福祉」はもちろん立派だ。しかし、まずは近くにいる人を思いやり、それを少しでもよいので行動に移す「小さな福祉」を行うことが大事だと思う。「小さな福祉」もたくさん集まれば、人々がお互いを助け合う「福祉の輪」が広がり、よりよい社会ができてゆくはずだ。

僕は、今までたくさんの人のささやかな善意に助けられ、支えられてきた。僕も彼らと同じように、心の中の「ささやかな善意」を勇気を出して行動に変え、身の周りの人をほんの少しでも助け、支えられる人になりたい。